

第6節 梅田東前谷中峯遺跡の総括

調査の結果、梅田東前谷中峯遺跡は弥生時代後期、古墳時代前期、奈良時代後半期に小規模な集落が営まれていたことが明らかになった(第116図)。本節では時期ごとに集落の構成を確認し、周辺遺跡の動向とあわせて本遺跡の性格を考えてみたい。

1 梅田東前谷中峯遺跡の集落構成

弥生時代後期後葉

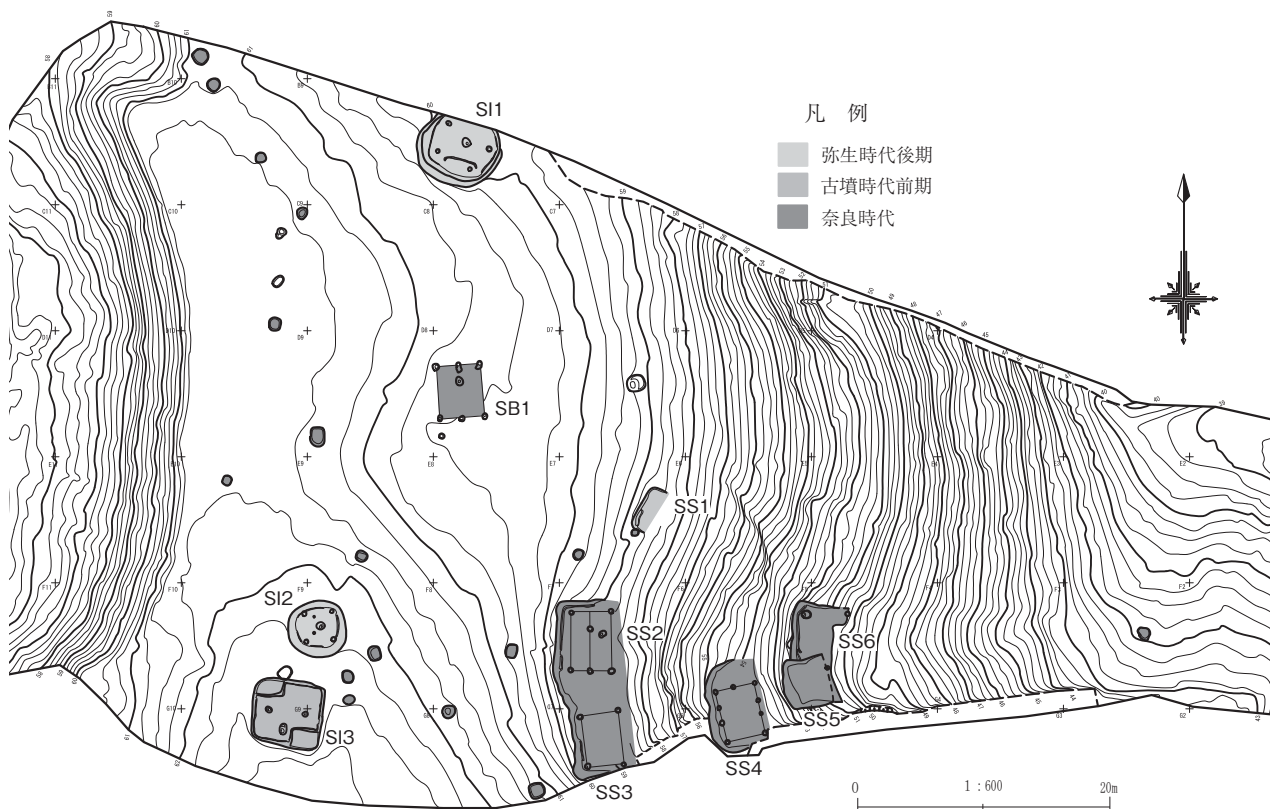
弥生時代後期後葉の主な遺構はSI1・SI2の竪穴住居2棟である。SI1は5本柱で五角形プランをもつ竪穴住居で、鉄器が3点出土した点で注目されよう。SI2は4本柱で隅丸方形プランをもつ、床面積8.5㎡のやや小型の竪穴住居で、いわゆる焼失住居である。

両者の確実な共時存在を示す資料はないが、あえて時期的な前後関係を想定する根拠もないため、ここでは同時並存した可能性が高いと見ておく。なお、本遺跡では調査前の表面観察で竪穴住居を明瞭に確認できたことを受けて、未調査部分の丘陵上を踏査したが、類似する窪地は一箇所も確認できなかった。このため、調査地外には竪穴住居は存在しない可能性が高い。ただし、土坑や掘立柱建物といった、竪穴住居以外の遺構が調査地外に広がる可能性は十分考えられる。

このように、この時期には竪穴住居2棟からなる極めて小規模な集落が営まれていたと考えられる。この集落に居住していた集団は、「単位集団」(近藤1959)ないしは「世帯共同体」(都出1989)として把握されるものであったと考えられる。

古墳時代前期中葉～後葉

古墳時代前期の遺構はSI3の竪穴住居1棟のみである。この住居は屋内高床部を有する点で注目さ



第116図 時期別遺構配置図

れる。高床部が床面の対角に2ヶ所設けられる類例の少ない形態である。なお、住居の基本形態は、方形プランで2本支柱穴をもつ該期に一般的なもので、床面積も23.0㎡と平均的な規模であった。

遺構が調査地外に展開する可能性は残すものの、集落の規模は極めて小さかったと考えられる。該期も弥生時代後期後葉と同じく、最小単位の集団での居住がなされていたと考えられる。

奈良時代後半期

奈良時代後半期の建物には、掘立柱建物1棟(SB1)、段状遺構5基(SS2～6)がある。段状遺構のうち4基には掘立柱建物が伴っているので、調査地内の掘立柱建物は全部で5棟となる。このうち、SB1のみが丘陵上平坦部に築かれ、他は東斜面部に築かれている。斜面に建物を建てようとするれば当然平坦面の造成が必要となるので、掘立柱建物が5棟、丘陵上と斜面に立地を違えて築かれていると考えてもよいだろう。実際、SB1とSS2・3・6の掘立柱建物はピットの配置や火処の位置、遺物の出土状況が類似しているので、同様の機能を有していた可能性が高い。

SS5とSS6は切り合っており、SS6→SS5の順に築かれる。また、SS6の下面は奈良時代の遺物も含む包含層となっており、古代集落の形成初期にはSS6は築かれていなかった可能性が高い。ただし、出土遺物ではSS6と他の遺構群には時期差は見られない。したがって、SS5のみが後出のもので、その他の遺構は構築時期に前後があるかもしれないが、機能していた時期は重なり合っていると考えられる。なお、丘陵東斜面の調査地南側では段状遺構の地表面で見られたようなテラス地形がいくらか認められるので、同様の遺構が調査地外に存在する可能性がある。

このほかに、この時期に帰属する可能性が高い製炭土坑が17基(SK1～17)ある。これらによって生産された木炭は、鉄器製作などに用いる工業用燃料となった可能性が高いと考えている。ただし、調査では直接鍛冶に関連する遺構・遺物は確認していない。調査地外に鍛冶関連遺構がある可能性もあるだろうが、鉄滓1点すら確認できていないのでその可能性は低いと思われる。

2 周辺遺跡の展開と梅田東前谷中峯遺跡

弥生時代中期～古墳時代前期の周辺遺跡

近隣の遺跡からは弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構が数多く検出されている。これらは、いずれも至近距離に位置し、それぞれ緊密な関連をもって展開していたものと考えられる。

本遺跡から丘陵を一つ挟んだ西側の丘陵上に位置する梅田萱峯遺跡は弥生時代中期後葉～後期中葉の集落で、特に中期後葉の竪穴住居は26棟あり、集落規模がかなり大きかったことが明らかになっている(湯村・小山編2008)。細分時期ごとに竪穴住居数を見てみると、IV-1期は14棟で、10棟程度の併存が考えられている。続くIV-2～3期は12棟で、8棟程度の同時存在が想定されている。また、IV-3期には集落内に墳丘墓が造営されており、梅田萱峯遺跡中期集落の特異性を物語っている。その後、後期には集落は縮小しており、竪穴住居数は後期前葉で5棟(最大同時存在数4)、後期中葉では1棟のみである。後期集落が未調査部分に続く可能性も皆無ではないが、現時点では一つの単位集団による居住がなされていたと考えられる。

梅田東前谷中峯遺跡の東隣の丘陵上に位置する筥津乳母ヶ谷第2遺跡では、弥生時代後期後葉の竪穴住居11棟、掘立柱建物3棟、古墳時代前期初頭～前葉の竪穴住居3棟、掘立柱建物6棟などが確認されている(大川・濱本2007、小口・濱本2007)。いずれの時期とも、一時期3～4棟の竪穴住居で集落が形成されていたと考えられており、一つの単位集団が居住していたと捉えられる。

梅田萱峯遺跡と同一丘陵上に約1km離れて存在する八重第3遺跡でも弥生時代後期中葉～古墳時代前期の集落が確認されている(富長・江原1987)。弥生時代後期の竪穴住居は約11棟で、細分すると後期中葉が4棟、後期後葉が5棟となる。限られた範囲の調査のため不確実ではあるが、いずれの時期とも2～3棟ほどの竪穴住居からなる居住単位を2つ以上構成していたようである。このように、八重第3遺跡は上述の3つの後期集落とは異なり、複数の単位集団からなる集落と考えられる。

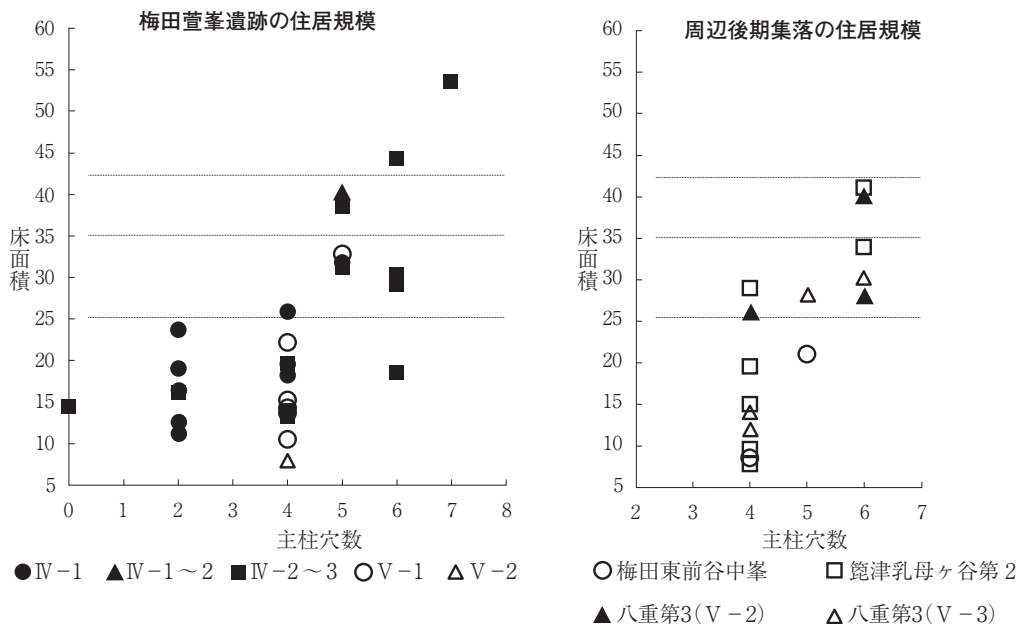
このほか、勝田川右岸の八幡遺跡からは弥生時代後期後葉の溝が見つかったので、こうした沖積地にも集落が存在していた可能性が高いが、その具体的な姿は不明である。また、饒津乳母ヶ谷第2遺跡から尾根を一つ挟んだ東側の丘陵上には、弥生時代後期後葉の墳丘墓と竪穴住居が1棟確認された湯坂遺跡が存在している。

このように、周辺地域での弥生時代中期～後期の集落変遷は、中期後葉に集住度の高い梅田萱峯集落が形成され、後期にこれが解体した後、複数の単位集団によって居住される八重第3遺跡と、一単位集団によって居住される小規模集落が複数出現するという流れで理解できそうである。この過程について、梅田東前谷中峯遺跡の性格を明らかにするため少し立ち入って考えてみたい。

弥生時代中期集落から後期集落への変遷

梅田萱峯遺跡の中期後葉集落と後期の各集落を比較した場合、まず集落規模において大きな格差が見られる。梅田萱峯遺跡の竪穴住居数は、中期後葉の時間幅で捉えた場合には総数26棟に上っており、後期後葉の住居数が最も多い饒津乳母ヶ谷第2遺跡の倍以上の数がある。また、同時存在の住居が10棟前後で、複数の居住単位から構成されるというあり方からも、後期集落とは質的な差を有していると考えられよう。このように、梅田萱峯遺跡の中期後葉集落は単位集団の「集合体」(近藤1983)としての性格をもっていたと考えられる。

梅田萱峯の中期集落の集合体は、後期には一つの単位集団で構成される小集落へと分散化しているように見える。後期集落の中で唯一、集合体的な構成をもつ可能性のある八重第3遺跡は、梅田萱峯中期集落に迫るだけの規模であった可能性もある。ただし、遺構密度は梅田萱峯中期集落に比して低いため、集落規模はこれより小さく見積もられるだろう。また、八重第3遺跡は後期前葉の遺構遺物



第117図 竪穴住居規模の比較

を欠いており、梅田萱峯遺跡の中期後葉の集合体的集落をそのまま受け継いでいるわけではない。周辺には後期前葉の遺跡が少ないため詳細は不明だが、後期前葉の集落は、梅田萱峯遺跡に見られるように、一旦分散化ないしは小規模化していると考えておこう。こうした分散化、小規模化を経て、後期中葉以降集落がいくらか拡大し、集合体化したものが八重第3遺跡であったと考えられる。

次に、集落内の竪穴住居に目を移してみると、梅田萱峯中期集落と後期集落とではその構成のされ方が異なっていることが分かる(第117図)。特に注目されるのは、梅田萱峯遺跡の中期集落に構成されている超大型(53.7㎡、44.3㎡)の竪穴住居である。後期集落にはこうした住居は見出せない。この点から見ても、梅田萱峯中期集落と後期集落には質的な差があると思われる。すなわち、集合体的な集落である梅田萱峯遺跡には遺跡内でも大きな格差をもって竪穴住居が構成されており、集落内での集団構成の複雑化や組織化が進行していたと推察できる。さらに住居以外の遺構のあり方もこれを裏付けており、集落内には独立棟持柱をもつ掘立柱建物や、大型の貯蔵施設と見られる方形土坑群、そして墳丘墓が存在することから、周辺地域における梅田萱峯遺跡の優位性と、集落内での首長層の伸張がうかがえよう。これに対し、後期集落の場合、構成住居数の多い集落では、大型(36～41㎡)、やや大型(25～35㎡)、中型(8～24㎡)および小型(8㎡以下)と大小の住居がほぼバランスよく組み合わせ、これに1～2棟の掘立柱建物をともなって集落が形成されていたようである⁽¹⁾。こうした後期集落の住居規模の構成と、超大型を除いた中期後葉集落の住居規模の構成とを比べてみると、両者間で類同性が高いことが分かる。したがって、後期集落は、八重第3遺跡も含めて中期後葉集落の「一般的」な部分のみからなっているととも考えられる。この一般的な居住単位が分立し、単独ないしは複合(八重第3遺跡)して居住域を形成したのが後期集落だと捉えることも可能であろう。

梅田周辺の丘陵地域における中期集落から後期集落への変遷を以上のように考えたが、当然ながら両者に直接の系譜関係があるかどうかは明らかにはできない。しかし、少なくとも、中期後葉段階に集住的な集落が解体した後、近隣地域に後期集落が分立するという現象には、社会的に連続性があると考えられる。これに積極的な評価を与えるならば、生産単位として自立性を高めた単位集団が、新たな生産領域を開発しながら周辺地域に分散していったものと考えられよう。こうした前提に立てば、梅田東前谷中峯遺跡は、谷間に延びる狭い沖積地を谷水田として開発し、その近傍に居住地を構えることで形成された集落であったと評価できるだろう。

このような流れを踏まえると、集落が分散化し、小規模化することが必ずしも地域社会の「衰退」を示しているわけではないと言える。特に後期後葉の集落は小規模ながらも、その数は確実に増加しており、地域社会全体で見れば集団規模は拡大していると思われる。そして、その地域集団内において優位を占めた単位集団が存在していたことも、湯坂遺跡での墳丘墓の存在から明らかである。このような後期後葉における集落の増加現象は他の地域でも起こっており、なかには集落の著しい大規模化が起こる地域も見られる⁽²⁾。梅田周辺の丘陵域遺跡群ではこうした様子うかがえないものの、後期後葉に生じた変化はこれらの他地域と連動した社会変化であったと考えられるだろう。

奈良時代の周辺遺跡

奈良時代においても本遺跡と筧津乳母ヶ谷第2遺跡、梅田萱峯遺跡との関連性は非常に高い。

筧津乳母ヶ谷第2遺跡では本遺跡と同様に斜面地を利用した集落が営まれている。奈良時代には段状遺構5基が造られており、そのうち最大2基が同時存在の可能性がある。斜面地に集落が形成され始めたのは古墳時代後期後葉で、これ以降、奈良時代後半期ごろまで集落が継続しており、梅田東前

谷中峯遺跡と併存していた可能性が考えられる。このように、梅田東前谷中峯遺跡と筥津乳母ヶ谷第2遺跡の古代集落は、至近距離に位置し、共通の立地で類似遺構が築かれている点からみて、近縁性が非常に高いと言えよう。

梅田萱峯遺跡は、立地の面では梅田東前谷中峯遺跡や筥津乳母ヶ谷第2遺跡と異なり、尾根上の平坦面に古代集落が営まれている。未調査地に集落が広がる可能性が極めて高く、その全容は不明であるが、調査範囲内からは竪穴住居1棟、掘立柱建物2棟などが見つかっている。いずれも奈良時代後半期に属するもので、梅田東前谷中峯遺跡と併存していた可能性は高い。

筥津乳母ヶ谷第2遺跡、梅田萱峯遺跡ではともに鍛冶関連遺構が確認されている。筥津乳母ヶ谷第2遺跡の段状遺構からは、部分発掘ながら鍛冶関連遺物が大量に発見されており、未発掘部分に鍛冶炉が存在していた可能性が高いと考えられている。この遺構は7世紀代から8世紀代にかけて継続しており、梅田東前谷中峯遺跡の集落とも併存していた可能性がある。一方、梅田萱峯遺跡では奈良時代後半期の掘立柱建物をともなう鍛冶炉が確認されており、小規模な鍛冶が行われていたと推定されている。鍛冶には燃料となる木炭の供給が欠かせないが、両者とも調査地内では製炭土坑は確認されていない。ともに未調査地に集落が広がるため単に調査地内で見つかっていないだけかもしれないが、梅田東前谷中峯遺跡で検出された製炭土坑の多くが該期に帰属する可能性の高いことを積極的に評価すれば、本遺跡で生産された木炭がこうした鍛冶遺構に供給されていたと考えることも可能であろう。これらの遺跡との直接の関係がなくとも、梅田東前谷中峯遺跡で生産した木炭は近隣の鍛冶遺構を有する遺跡へと搬出していた可能性があると考えている。これを証明することは難しいが、いずれにしても、本遺跡や筥津乳母ヶ谷第2遺跡、梅田萱峯遺跡に見るように、周辺丘陵に展開する奈良時代の遺跡は工業生産に関連する領域を含みながら集落を形成していたと考えられる⁽³⁾。

【註】

- (1) 床面積を基準とした竪穴住居規模の区分には、妻木晩田遺跡の住居の統計的な分析から導き出された馬路晃祥氏の分類を参考にしている(馬路2006)。
- (2) 加勢蛇川下流域周辺の丘陵部や淀江平野周辺の丘陵部などでは、後期後葉に遺跡数が急増するだけでなく、笠見第3遺跡や妻木晩田遺跡などに代表されるように、集落が著しく大規模化している。
- (3) これら丘陵地の遺跡と対照的な遺跡として、勝田川右岸の八幡遺跡があげられる。この遺跡では7世紀後半から8世紀代にかけて掘立柱建物10棟、竪穴住居5棟などが築かれている。総柱の高床建物を含み、出土遺物に墨書土器、転用硯があることから、一般的な集落とは異なった行政機能をもった官衙関連遺跡と評価されている(野口編2005)。

【引用文献】

- 大川泰広・濱本利幸2007『筥津乳母ヶ谷第2遺跡Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書12
 小口英一郎・濱本利幸2008『梅田萱峯遺跡Ⅲ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書19
 小口英一郎・濱本利幸2007『筥津乳母ヶ谷第2遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書15
 近藤義郎1959「共同体と単位集団」『考古学研究』6-1 考古学研究会
 近藤義郎1983『前方後円墳の時代』岩波書店
 高尾浩司・浅田康行2007『梅田萱峯遺跡Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書11
 都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
 富長源十郎・江原俊雄1987『八重第3遺跡』中山町教育委員会
 野口良也編2005『八幡遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書99 (財)鳥取県教育文化財団
 馬路晃祥2006「竪穴住居からみた妻木晩田遺跡の集落構造」『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書-第8・11・13次調査-』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅱ集 鳥取県教育委員会
 湯村功・小口英一郎・濱本利幸2007『梅田萱峯遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書16
 湯村功・小山浩和編2008『梅田萱峯遺跡Ⅳ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書22

表41 梅田東前谷中峯遺跡出土土器観察表(1)

遺物番号	挿図図版	遺構地区層位	種類	器種	法量(cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調
1	第74図 PL.61	SI1 床直他 SK20 埋土中	弥生土器	甕	口径※16.7 器高△18.3	外面口縁部上半平行沈線後ナデ消し。口縁部下半平行沈線。頸部ナデ。肩部貝殻腹縁による押し引き波状文。概して風化。内面口縁部ヨコナデ。頸部横方向ミガキ。頸部以下ケズリ。	やや粗(1mm大の砂粒含む)	良好	外面にぶい黄橙色。内面明黄褐色
2	第74図 PL.61	SI1 9・10層	弥生土器	甕	器高△3.8	外面口縁部8条以上の平行沈線。頸部ヨコナデ。内面ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
3	第74図 PL.61	SI1 9+11層	弥生土器	甕	口径※18.4 器高△4.1	外面口縁部風化のため調整不明。頸部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
4	第74図 PL.61	SI1 5+9層	弥生土器	甕	器高△4.9 底径 4.5	外面縦方向ミガキ。底部ヨコナデ。内面上方向ケズリ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも浅黄色
5	第74図 PL.61	SI1 9・10層	土師器	甕	口径※14.8 器高△ 5.8	外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ後ナデ。	密(1mm大の砂粒含む)	やや不良	外面黄橙色。内面黄橙色~にぶい黄橙色
6	第74図 PL.61	SI1 9・10層	土師器	甕	口径※16.0 器高△ 6.7	外面ヨコナデ。内面風化のため調整不明瞭。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
7	第74図 PL.61	SI1 5~8層	土師器	甕	口径※31.2 器高△ 7.6	外面ナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	外面橙色。内面明黄褐色
8	第74図 PL.61	SI1 5~8層	土師器	甕	器高△6.1	外面ヨコナデ。内面口縁部~頸部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	やや粗(1mm大の砂粒多く含む)	良好	内外面とも黄橙色
9	第74図 PL.61	SI2 14層	弥生土器	甕	口径※17.2 器高△ 5.4	外面口縁部風化のため調整不明。頸部ヨコナデ。内面口縁部丁寧なナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも橙色
10	第77図 PL.62	SI2 14層	弥生土器	甕	器高△3.8	外面風化のため調整不明。内面口縁部~頸部ナデか。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	粗(1~3mm大の砂粒多く含む)	良好	外面黄褐色。内面浅黄褐色。
11	第77図 PL.62	SI2 1~2+11層	弥生土器	甕	口径※13.0 器高△ 3.7	内外面とも風化のため調整不明。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	外面橙色。内面明黄褐色
12	第77図 PL.62	SI2 11層	弥生土器	小型壺	口径※8.8 器高※7.6	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内面口縁部ヨコナデ。体部上半ケズリ、下半ケズリ後ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
13	第80図 PL.63	SI3 床面直上	土師器	甕	口径※13.8 器高△13.5	内外面とも風化著しい。内面頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密(1mm以下の砂粒含む)	不良	内外面とも黄褐色
14	第80図 PL.63	SI3 床面直上	土師器	高坏	器高△12.8 底径※12.8	内外面とも風化著しい。外面筒部タテハケが認められる。	密(1mm大の砂粒含む)	不良	内外面とも黄褐色~明赤褐色
15	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	甕	口径※14.4 器高△ 3.9	内外面ともヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
16	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	甕	器高△ 3.8	内外面ともヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも橙色
17	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	甕	器高△ 3.6	内外面ともヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも淡黄色
18	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	壺	口径※16.0 器高△ 4.8	内外面とも風化のため調整不明。ナデか。	密(1mm以下の砂粒含む)	やや不良	外面にぶい黄橙色。内面浅黄褐色
19	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	壺	口径※19.0 器高△ 6.8	内外面とも風化のため調整不明。ナデか。	密(1mm大の砂粒含む)	やや不良	内外面とも黄褐色
20	第82図 PL.64	SS1 1層	土師器	壺	器高△ 4.6	内外面ともヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも橙色
21	第82図 PL.64	SS1 2層	弥生土器	低脚坏	口径※8.4 器高△3.6	外面風化のため調整不明。内面ケズリ後ナデ。底部焼成前穿孔	密	良好	内外面とも黄褐色
22	第83図 PL.64	F8 II層	弥生土器	甕	口径※17.6 器高△5.8	外面口縁部7~8条の平行沈線。頸部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	外面橙色。内面明黄褐色

表42 梅田東前谷中峯遺跡出土土器観察表(2)

遺物番号	挿図図版	遺構地区層位	種類	器種	法量(cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調
23	第83図 PL.65	F9 II層	弥生土器	甕	口径※17.4 器高△5.9	内外面とも風化著しい。外面口縁部わずかに多条化した平行沈線が認められる。	粗(1~3mm大の砂粒多量に含む)	やや不良	内外面ともにおい黄橙色
24	第83図 PL.65	C9 II層	弥生土器	甕	口径※14.0 器高△4.4	外面口縁部3条以上の平行沈線。頸部ヨコナデ、貝殻腹縁刺突文。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
25	第83図 PL.64	C6 II層	弥生土器	甕	口径※14.8 器高△5.1	外面風化著しい。口縁部平行沈線認められる。肩部貝殻腹縁による押し引き波状文。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密(1~2mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも明赤褐色
26	第83図 PL.64	G7 II層	弥生土器	甕	口径※17.5 器高△5.3	外面口縁部多条化した平行沈線。頸部ナデ。内面風化のため調整不明。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗(3mm以下の砂粒多く含む)	良好	外面黄灰色。内面浅黄色
27	第83図 PL.64	E8 II層	弥生土器	甕	口径※15.6 器高△4.8	外面口縁部乱れた平行沈線。頸部ヨコナデ。内面口縁部工具によるナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	外面黒褐色。内面褐灰色
28	第83図 PL.64	F9 II層	弥生土器	甕	口径※18.2 器高△4.4	外面口縁部貝殻条痕による波状文。内面風化のため調整不明。	粗(1~5mmの砂礫を含む)	良好	内外面とも灰白色
29	第83図 PL.64	F9 II層	弥生土器	甕	口径※15.2 器高△5.5	外面口縁部多条化した波状文。一部ナデ消し。頸部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密(1~2mm大の砂粒含む)	良好	内外面ともにおい黄橙色
30	第83図 PL.64	B9 II層	弥生土器	甕	器高△4.7	外面口縁部乱れた平行沈線後一部ナデ消し。頸部ヨコナデ。内面ミガキ。	密(1mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも明黄褐色
31	第83図 PL.64	B9 II層	弥生土器	甕	器高△4.6	外面口縁部7条平行沈線。頸部ヨコナデ。内面口縁部~頸部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密(1~2mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも橙色
32	第83図	F2 II層	弥生土器	高坏	器高△4.0 底径※9.2	外面裾部多条化した平行沈線。内外面風化著しい。	やや粗(2mm以下の砂粒多く含む)	やや不良	内外面とも浅黄橙色
33	第83図 PL.65	E6 II層	土師器	壺	口径※21.5 器高△10.4	内外面風化のため調整不明。内面頸部以下ケズリ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面ともにおい黄橙色
34	第85図 PL.66	SB1 II層	須恵器	坏	口径※13.2 器高 4.2 底径 8.4	外面回転ナデ。体部下ケズリ後ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部不整ナデ。	密	良好	内外面ともにおい褐色~灰褐色
35	第85図 PL.66	SB1 II層	須恵器	坏	口径※12.4 器高 4.4 底径 8.2	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部風化のため調整不明。	密	やや不良	内外面とも灰色~明褐色
36	第85図 PL.66	SB1 II層	須恵器	坏	器高△4.0 底径 8.5	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部回転ナデ後不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む。7mm大の礫わずかに含む)	良好	内外面とも灰色
37	第85図 PL.66	SB1 II層	須恵器	坏	器高△4.3	内外面とも回転ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも緑灰色
38	第85図 PL.66	SB1 II層	須恵器	皿	口径※16.0 器高△2.2	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも青灰色
39	第85図 PL.66	SB1-P7 埋土中	土師器	甕	口径※25.6 器高△6.6	外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密(1mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも橙色
40	第87図 PL.68	SS2 4層	須恵器	坏	口径※13.2 器高※4.3 底径※8.6	外面体部回転ナデか。風化著しい。底部回転糸切り後不整ナデ。内面体部回転ナデか。底部風化のため調整不明。	密	不良	内外面とも灰オリーブ色
41	第87図 PL.68	SS2 4層	須恵器	坏	口径※14.6 器高△2.9	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも褐灰色
42	第87図 PL.68	SS2 4層	須恵器	坏	器高△1.8 底径※8.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	褐色

表43 梅田東前谷中峯遺跡出土土器観察表(3)

遺物番号	挿図図版	遺構地区層位	種類	器種	法量(cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調
43	第87図 PL.67	SS2-P7 埋土中	土師器	甕	口径 20.5 器高△19.0	外面口縁部ヨコナデ。肩部風化のため調整不明。最大径付近タテハケ。以下斜方向ハケ。内面口縁部風化著しい。ナデか。頸部以下上方向ケズリ。底部左方向ケズリ。	密(1~2mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも橙色
44	第90図 PL.67	SS4 床面直上+ SS4-P6 埋土中	土師器	甕	口径※26.6 器高△17.8	外面口縁部~頸部ヨコナデ。体部上半タテハケ。下半斜~タテハケ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下横方向ケズリ。	密(1mm大の砂粒含む)	やや不良	内外面とも橙色
45	第93図 PL.68	SS6 床面直上	須恵器	坏	口径 15.7 器高 5.1 底径 10.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り後不整ナデ。内面体部回転ナデ。底部不整ナデ。	密	やや不良	外面橙色~灰黄色。内面灰黄褐色~灰黄色
46	第98図 PL.68	SK5	土師器	甕	器高△3.1	内外面ともヨコナデ。	密(1mm大の砂粒含む)	良好	外面明黄褐色。内面浅黄橙色
47	第108図 PL.68	SK16	須恵器	坏	口径 12.3 器高 4.1 底径 7.55	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも灰色
48	第108図 PL.68	SK16	土師器	高坏	器高△4.8	外面タテハケ。内面筒部ケズリ後ナデ。裾部ケズリ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色
49	第111図 PL.68	F2 II'層	須恵器	壺	器高△13.3	外面体部上半回転ナデ。下半格子目叩き。底部ヘラ切り後ナデ。内面体部回転ナデ。下半に一部当具痕。底部当具痕。	密	良好	外面灰色。内面灰~灰白色
50	第111図 PL.68	E2 II'層	須恵器	坏	口径 11.4 器高△ 4.1	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	不良	内外とも灰オリーブ色
51	第111図 PL.68	F2 II'層	土師器	甕	口径 29.0 器高※25.9	外面口縁部~頸部ヨコナデ。肩部2条の沈線。体部ナデ。一部布目痕。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部右方向ケズリ。肩部以下上方向ケズリ。	やや粗(1~3mm大の砂粒含む)	良好	外面橙色。内面にぶい黄橙色
52	第111図	F2 II'層	土師器	甕	口径※30.4 器高△12.1	外面口縁部~肩部ヨコナデ。以下タテハケが認められる。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右上方向ケズリ。	密(1mm大の砂粒含む)	良好	内外面ともぶい黄橙色
53	第111図 PL.65	E2 II'層	土師器	壺	口径※20.6 器高△12.4	内外面とも口縁部ヨコナデ。頸部以下風化のため調整不明。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも明黄褐色
54	第112図 PL.69	C6 II層	須恵器	坏	口径※13.0 器高 5.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り後一部ナデ。内面回転ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外とも暗青灰色
55	第112図 PL.69	F7 表土	須恵器	坏	口径※15.4 器高 4.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密	不良	内外面とも黄灰色
56	第112図 PL.69	C7 II層	須恵器	坏	口径※14.5 器高△ 5.1	内外面回転ナデ。外面一部不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも灰色
57	第112図 PL.69	C・D7 II層	須恵器	坏	口径※14.6 器高 6.4 底径※ 9.6	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部から体部下半回転ナデ放射状指ナデ。底部不整ナデ。	密	良好	内外面とも灰色
58	第112図 PL.69	F4 II'層	須恵器	坏	口径※11.6 器高 3.8 底径※ 8.1	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り後ナデ。内面体部回転ナデ。底部回転ナデ後不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも灰色
59	第112図 PL.69	東斜面部 南側表採	須恵器	坏	口径※11.2 器高△ 4.9	内外面回転ナデ。	密	良好	内外面とも緑灰色
60	第112図 PL.69	F4 II'層	須恵器	坏	口径※14.4 器高 4.0	外面体部回転ナデ。底部風化のため調整不明。内面回転ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	不良	内外面とも黄灰色~褐色
61	第112図 PL.69	D2 II'層	須恵器	坏	口径※11.8 器高 3.8 底径※ 9.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部不整ナデ。	密(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面ともオリーブ灰色

表44 梅田東前谷中峯遺跡出土土器観察表(4)

遺物 番号	挿図 図版	遺構 地区 層位	種類	器種	法量(cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調
62	第112図 PL.69	E2 II'層	須恵器	坏	口径※11.5 器高 4.2 底径※ 8.2	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り後ナデ。 内面回転ナデ。	密(1mm以下の砂 粒含む)	良好	内外面とも明赤褐色～赤灰色
63	第112図 PL.69	E2 II'層	須恵器	高台坏	器高△2.2 底径※9.8	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。 内面体部～底部回転ナデ。見込み当具痕ナ デ消し。	密(1mm以下の砂 粒含む)	良好	内外面とも灰色
64	第112図	D2 II'層	須恵器	高台坏	器高△1.6 底径※9.1	外面体部回転ナデ。底部ヘラ切り後ナデ。 内面回転ナデ。	密(1mm以下の砂 粒含む)	良好	内外面とも
65	第112図 PL.69	D2 II'層	須恵器	小型壺	器高△2.9 底径※5.9	内外面回転ナデ。	密(2mm以下の砂 粒含む)	良好	内外面灰黄色
66	第112図 PL.70	E7・8 II層	土師器	甕	口径※30.6 器高△ 7.8	外面口縁部ヨコナデ。頸部以下タテハケ。 内面口縁部～頸部ヨコナデ。以下ケズリ。	密(1mm大の砂粒 含む)	良好	内外面とも橙色
67	第112図 PL.70	F2 II'層	土師器	甕	口径※31.0 器高△ 8.1	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ後一 部ナデ。	やや粗(1～3mm 大の砂粒含む)	良好	内外とも明黄褐色
68	第112図 PL.70	F2 II'層	土師器	甕	口径※27.0 器高△ 8.2	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密(1mm以下の砂 粒含む)	良好	内外とも明赤褐色

表45 梅田東前谷中峯遺跡出土鉄器観察表

掲載 番号	挿図 図版	遺構・層位	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
F1	第74図 PL.71	SI1 床面直上	鉈	△ 13.0	△ 1.9	0.3	14.0	鍛造品。刃部欠損。柄部が薄手。
F2	第74図 PL.71	SI1 床面付近	不明板状鉄製品	△ 4.7	△ 3.3	0.25	16.8	鍛造品破片。酸化土砂に覆われる。銹化により内部空洞化。
F3	第74図 PL.71	SI1 埋土下層	不明棒状鉄製品	△ 2.3	0.7	0.25	2.2	鍛造品。上下端とも欠損。

表46 梅田東前谷中峯遺跡出土石器観察表

掲載番号	挿図	グリッド	遺構	層位	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)*	備考
S1	第74図	B7・8	SI1	下層	石鏃	サヌカイト	3.1	1.8	0.3	1.1	裏面に素材面残。左脚部欠損
S2	第74図	B7・8	SI1	下層	石鏃	サヌカイト	2.6	1.5	0.3	1.1	表裏面に素材面残
S3	第74図	B7・8	SI1	1層	石鏃	サヌカイト	1.9	1.3	0.5	0.6	脚部古欠。風化顕著
S4	第74図	B7・8	SI1	中層	石鏃	黒曜石	△ 1.9	△ 1.6	0.3	1.0	先端・両脚古欠
S5	第74図	B7・8	SI1	上・中層	台石	安山岩	△ 16.1	△ 11.4	7.4	2000	明確な使用痕は確認できない
S6	第74図	B7・8	SI1	床直	磨石	安山岩	17.6	6.6	5.8	1070	一面に磨り面
S7	第74図	B7・8	SI1	上層	磨石	安山岩	8.8	6.1	3.1	240	ほぼ全面が磨り面
S8	第74図	B7・8	SI1	床直	磨石(?)	安山岩	12.3	6.5	2.8	330	明確な擦痕は確認できない
S9	第74図	B7・8	SI1	下層	敲石	安山岩	10.2	5.0	4.7	310	上下端に敲打痕
S10	第77図	F8・9	SI2	17層	石錘	安山岩	4.4	4.1	1.5	36.0	打ち欠き石錘
S11	第77図	F8・9	SI2	17層	敲石	安山岩	16.0	7.8	6.0	940	一端に敲打痕
S12	第77図	F8・9	SI2	1～2層	石鏃	サヌカイト	2.5	1.8	0.3	1.4	表裏面に素材面残
S13	第80図	G9他	SI3	床直	台石	安山岩	△ 24.1	△ 14.7	8.8	2650	明確な使用痕は確認できない
S14	第80図	G9他	SI3	19層	砥石	細粒花崗岩	9.6	8.3	5.9	720	砥石目極細。細かな擦痕多数
S15	第80図	G9他	SI3	下層	砥石	流紋岩質凝灰岩	13.7	4.1	3.1	180	砥石目極細。擦痕・傷痕多数。
S16	第82図	E6	SS1	検出面	敲石	安山岩	△ 5.3	6.6	6.2	270	一端に敲打痕・剥離痕
S17	第87図	F6	SS2	床付近	磨石(?)	安山岩	9.1	5.4	4.1	270	明確な擦痕は確認できない
S18	第90図	F・G5	SS4	3層	磨石	安山岩	10.4	6.5	5.6	550	一面に磨り面
S19	第90図	F・G5	SS4	3層	磨石(?)	安山岩	9.3	5.6	4.7	330	明確な擦痕は確認できない
S20	第114図	F9	-	II層	石鏃	黒曜石	1.9	1.6	0.3	0.5	
S21	第114図	E7	-	II層	石鏃	黒曜石	2.0	△ 1.3	0.4	0.5	脚部古欠
S22	第114図	C8	-	II層	石鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.3	0.5	表裏面に素材面残
S23	第114図	F7	-	II層	石鏃	黒曜石	2.4	△ 1.6	0.4	0.8	表裏面に素材面残。脚部欠損
S24	第114図	B8	-	II層	石鏃	サヌカイト	1.9	1.6	0.4	0.7	
S25	第114図	E7	-	II層	石鏃	サヌカイト	2.6	1.9	0.5	1.5	表裏面に素材面残
S26	第114図	G6	SS3	埋土中	石鏃	サヌカイト	2.5	1.9	0.4	1.5	表面に素材面残
S27	第114図	F3	-	II層	スクレイパー	黒曜石	2.6	5.2	1.0	11.6	刃部に微細剥離痕、摩滅あり
S28	第114図	D7	-	II層	敲石	安山岩	7.2	6.1	6.0	350	一端に敲打痕
S29	第114図	D6	-	II層	敲石	安山岩	16.7	6.9	6.6	1100	上下端に敲打痕
S30	第114図	D7	-	II層	敲石	安山岩	17.8	8.1	7.0	1600	上下端に敲打痕
S31	第114図	E7	-	II層	砥石	細粒花崗岩	△ 5.6	4.5	4.5	150	砥石目細。細かな擦痕あり
S32	第114図	F4	-	II層	砥石	細粒花崗岩	11.3	5.5	3.5	350	砥石目極細。擦痕・傷痕多数

* 重量100g以上のものは10g単位で計量